Ⅲ．種子島を通してみる日本離島のもつ問題点

第Ⅰ章では，Ⅱ章の詳細は記載に対する予備知識と，島全体の性格にふれた。

第Ⅱ章では，主な地理的環境要素を，農業を営む上からの適否に観点をおいて考察した。したがって，§の立て方が系統的になっていないが，特に関係深い要因を組み合せて記載した。

第Ⅲ章では，具体的な種子島の例から表れた，離島ゆえの悩み，問題点を指摘し，それを改善にむかわせる指標を，振興会等の資料をもとに考察した。

でき上った論文をみると，当初の意図を反映したものとしては，実に不本意なできばえである。

歴史の扱いが，ほとんど地理の要素として消化されていないこと。地誌としての重要な集落の記載が手薄であること等々，不備がいたるところ目につく。

しかし，歴史書に決定版というものがないのと同様，地誌にも，最終的なものはないという。その地域のインフォメーションが増すにつれ，また地域が変貌していくにつれてそれは書き改められるべきものであろう。

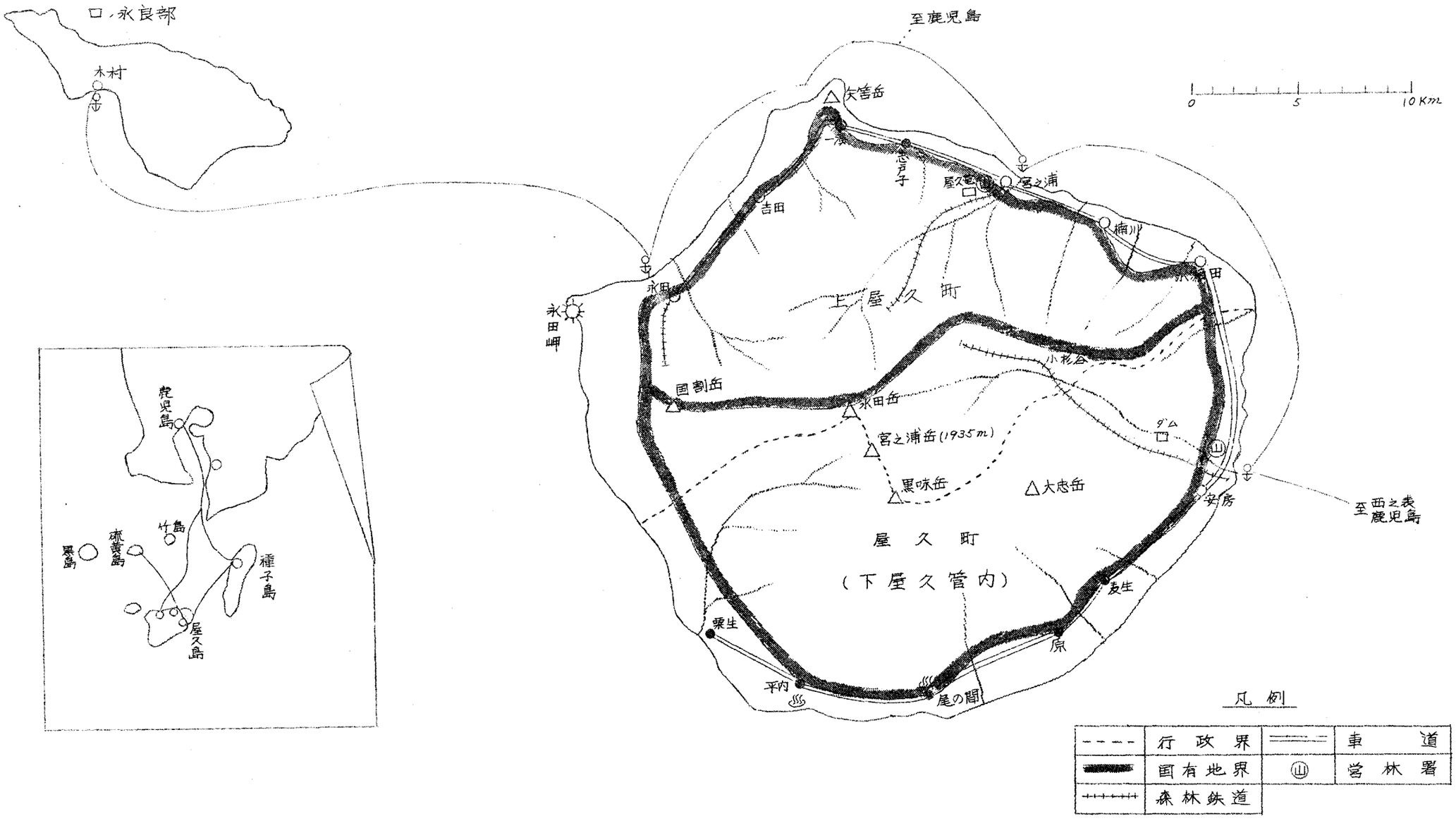
この調査中，既存の研究資料が少く，統計資料が充分でなく，現地調査が満足に行われなかったことによるこの地誌の不完全さも，この意味では，弁解の余地も感じ，書いた意義をも感じる者である。

屋久島の地誌

深　津　紀　代　美

1　調査地域と研究の目的

調査地域として選んだ屋久島は，九州の南端佐多岬の南方75km，種子島の西側にある，ほゞ円形の島で，東西28km，南北約24km，面積540km²，人口約22000人である。行政的には島の北半と口永良部島を合わせて上屋久島，南半は屋久町となっているが，口永楽部島は調査の対象としなかった。（屋久島のみでも日本で第5位の面積をもち，広範囲になりすぎるので）屋久島を調査地域とした理由は①離島問題に興味を持っていた事②島は地理の目的であるところの地域性をつかむのに割合容易ではないかと考えた事③屋久島には，自然人文共に興味深い現象が見られ，資料も比較的豊富である事④種子島をやる人がいるので比較研究が可能ではないかと考えた事などである。しかしこのような遠隔地をフィールドとして選択した事は，現地へ行く日時も限られ，教官の指導もいきわたらず，私のように調査経験


口永良部
木村
至鹿児島
0
5
10 Km
大箆岳
一湯
志戸子
屋久島
宮之浦
楠川
小瀬田
吉田
永田
永田岬
上屋久町
小花
国割岳
永田岳
宮之浦岳(1935m)
黒味岳
大忠岳
ダム
安房
至西之表
鹿児島
屋久町
(下屋久管内)
麦生
原
栗生
平内
尾の間
鹿児島
竹島
赤蓋島
果島
種子島
屋久島
凡例
行政界
国有地界
森林鉄道
車道
営林署

を持たない者には無理であった。やはり初歩的段階においては，調査のテクニックを修得できるような場所を選ぶべきであろう。しかしその事を身にしみて感じた事は，負けおしみかも知れないが，ある意味では良かったと思う。

研究の目的は調査地域の地域性の追及（おざなりで漠然としているが）とし，曲りなりにも地誌をまとめ，屋久島の自然とそこに生きる人々の現実の生活をつかんで見たいと思った。その場合，島全体をフィールドとして扱うのは大きすぎて大変なので，島の一部をとりあげて問題点を深めてみたいと思ったのであるが，結局その前提としての島全体を概略的に記述する事で終ってしまったのは残念である。

2．論文の構成と内容

論文は次のような構成とした。

はしがき

第1章　調査地域概説

第2章　自然　　第1節（気候）第2節（地質）第3節（地形と土壌）

第3章　経済　　第1節（本島経済の特徴）第2節（農業）第3節（漁業と林業）第4節（工業）第5節（人口構成とその動態）

第3章を人文とせず経済としたのは，とかく総花的になりがちな地誌にまとまりをつけるため，焦点を島民の生活を根本的に支配していると思われる経済にしぼり，集落，歴史，交通等は関連のある箇所でふれる程度にしたからである。

〈自然〉

本島は気候的には南海型に属し，その地理的位置と黒潮の影響を受けて，高温多雨で海洋性の気候を示し，海岸付近（集落は1つを除きすべてここに立地）は亜熱帯的であり，植生も本土とは異ったものが多い。特徴としては，「1ケ月に35日雨が降る」といわれるほどの多雨と，九州一の宮之浦岳（1935m）をはじめとする山岳地帯の存在による垂直的気候の変化が顕著な事があげられる。又水平的にも北部と南部では相当異っており，作物などに与える影響が大きい。地質は地形とほゞ一致しており，島の周囲（西は除く）をとりまく海岸段丘は時代未詳の水成岩からなり，そこに斑状黒雲母花崗岩（長石の結晶が大）が逆入して島の大部分を占める山地を形成している。鉱産資源（タングステン等）や温泉の存在は島の今後の開発にとって重要である。土地利用の面から見て段丘（海岸，一部河岸）上は唯一の田畑，集落，道路等の立地する所であり，山地は森林となっている。一部に見られる溺れ

谷やリアス式海岸は漁港となっているが，水深が浅く良い港とはいえない。（鹿児島からの定期船は着岸できず，はしけで渡る）又数えきれないほどの放射状河川が発達している事は水力発電に非常に有利であるが，距離が短く勾配が急なので河口付近でも上流の様相を呈し，巨大な礫が畑地に散在し，水が冷いので水田では冷害がおこりやすい（早期栽培のため害が大きい。）

〈経済〉

本島では第1次産業の割合が80％と高く，逆に第2次産業の割合が低い事からもわかるように，産業構造が自給的段階にとどまっており，後進的である。島民の生活は農・林・水産の三業により支えられており，兼業率(93％)が高い。農業は経営規模が5反程度で零細であり，技術・機械の導入が遅れ，生産性が低い。作物は畑作中心で，最近商品用のポンカン，バナナ，甘蔗などが伸びてきているが，従来から甘藷も多くつくられ，米麦は自給に満たない。昭和36年に精糖工場ができて以来甘蔗の増反が奨励されていて，現在は原料不足の状態である。台風や土壌流失，冷水に対する対策が今後の問題となろう。漁業は江戸～大正にかけて鰹漁が盛んであったが，最近は動力船導入の失敗，漁場の推移等により，サバ・飛魚（5月のみ）以外は不振である。島の林野率は90％に達し，屋久杉が有名であるが，大部分国有林のため，林業も島民の経済生活をあまりうるおしてはいない。水力電気の豊富さは島の将来に一抹の明かるさを与えているが，市場への遠隔性，交通の不便等を考えると必ずしも期待できない。しかし現在屋久島電工KKが操業をはじめ，ダム工事が進められ，島も大分変わりつつある。

3、結　論

屋久島は自然的にも経済的にも，他の離島と共通な点を多くもっており，後進的状態におかれているが，水が豊富な事，低れんな電力がえられるという特殊条件を生かせば，将来は工業地域として発展する可能性がある。